

重要文化財

「福島県荒屋敷遺跡出土品」

平成30年10月31日指定

荒屋敷遺跡は縄文時代晩期を中心とした弥生時代中期にかけての遺跡で国道252号の宮下バイパス工事に伴い、昭和60年～62年にかけ、2,800㎡の発掘調査が実施されました。

出土品は縄文時代晩期～弥生時代中期にかけての土器・石器だけでなく、赤漆塗土器や漆の貯蔵容器、赤漆塗の巻紐や糸玉といった漆工芸の実態を明らかにした製品、浅鉢などの容器や斧柄など完成品とともに未成品が出土したことで製作工程を追うことが可能な木製品、編み組などが当時から行われていたことを示す籠類などの繊維製品等の有機質遺物が多数ありました。

これらは県内でも出土例がほとんどない貴重な考古資料として、平成18年4月に県の重要文化財に指定されました。平成26年から再整理・再調査を行い、縄文時代の技術と生業の実態を示す極めて学術的価値が高いものとあらためて評価され、平成30年10月、出土した約19万点に及ぶ遺物のうち589点が国の重要文化財として指定されました。

重要無形民俗文化財

「三島のサイノカミ」

平成20年3月13日指定

「三島のサイノカミ」は三島町において伝承されている小正月の火祭り行事で、江戸時代の古文書にも記述があります。東北地方の日本海側に伝承される小正月の火祭りの典型例の一つで、子どもや厄年の男性が行事に深く関わり、厄年の厄落としや年占の要素が濃厚にみられることに特色があります。

町では昭和30年代に多くの年中行事の存続が危ぶまれましたが昭和48年2月、冬の火祭りイベント「雪と火のまつり」を開催し、サイノカミを再現し観光イベントとして成功。以後、各地区のサイノカミや他の年中行事も活発化、並行して年中行事の調査も進められ、昭和60年には町が独自に定めた「地区プライド」として年中行事を選定、昭和61年3月には「三島町の年中行事」としてサイノカミをはじめ初春の行事が県の重要無形民俗文化財に指定されました。

平成に入ってから3年続けて「さいの神シンポジウム」を開催、10年代には町内外の研究者に依頼し、当町の各地区で実施されているサイノカミに関する本格的な調査報告をまとめました。そして平成20年3月、日本の小正月行事を知る上で重要なものとして、国の重要無形民俗文化財に指定されました。

伝統的工芸品

「奥会津編み組細工」

平成15年9月10日指定

昭和56年に三島町振興計画5本の柱の一つとして「生活工芸運動」が提唱されました。農林業の衰退や高度経済成長に伴う就労の変化やテレビ等情報が容易に入手できるようになると、それまでのような近所付き合いが少なくなり人間関係が希薄になることが危惧されるようになりました。このようなことから昔のように隣人や家族が囲炉裏を囲んでものづくりを行うことにより、会話を楽しみ人間関係の再構築を図ることを狙いとして生活工芸運動がスタートしました。

生活工芸運動はデザイナーを職員として招聘し、西方地区の空き家を借りてスタートしました。昭和61年に名入地区に生活工芸館を建設したことにより、以後生活工芸館を活動拠点として現在に至っています。

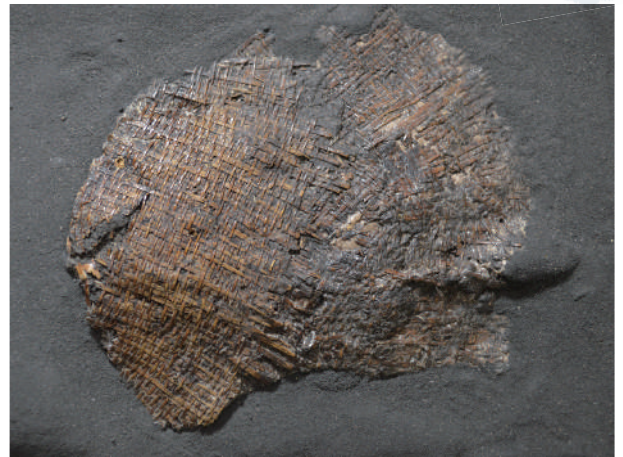
平成13年に各種ものづくり団体を統合し、ものづくりを楽しむ団体として三島町生活工芸運動友の会を設立。平成15年に三島町生活工芸運動友の会を母体として経済活動を行う団体、奥会津三島編み組品振興協議会を設立しています。平成15年9月10日、経済産業大臣よりヒロロ籠・マタタビ簀・山ブドウ籠が「奥会津編み組細工」の名称で伝統的工芸品に指定されました。

福島県荒屋敷遺跡出土品

荒屋敷遺跡は約2,400年前の、縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての遺跡です。土砂や地下水に埋もれた低湿地帯にあったため、有機質の遺物があまり分解されずに残り、土器や石器だけでなく、他の遺跡では稀にしか見られない木製品や漆塗製品、繊維製品といった遺物も多数発見されたことで、発掘当時から注目を浴びました。

指定された「荒屋敷遺跡出土品」

種 類	数 量
土器・土製品	146点
石器・石製品	284点
木器・木製品	94点
漆 塗 製 品	37点
繊維製品残欠	28点
合 計	589点



編み籠

土器は縄文時代後期から弥生時代中期までのものが見られ、縄文土器だけでなく畿内第一様式に並行する遠賀川系土器(弥生土器)が出土しており、東北地方に稲作文化が流入した経路をうかがうことができます。また、その他の土器も東北北部の型式のなかに、信越地域の土器型式の影響がみられます。土製品には結髪された土偶に漆で赤彩されたものが出土しており、東北南部における弥生文化受容直前の縄文人の精神生活を知ることができます。

石器には縄文文化特有の狩猟採集用具が揃い、石製品には精神生活の一端をうかがうことができる石棒、石冠、線刻礫、玉などが出土しています。

特徴的なのは有機質の遺物で、木製品には弓、斧柄、容器、木柱などが出土、特に浅鉢・鉢などの木製容器未製品の出土により、その製作工程を追うことが可能になりました。繊維製品には編み籠の残欠があり、編み組みが当時から行われていたことが明らかになりました。漆塗製品は土器、土偶、弓、赤漆塗糸玉、腕輪、櫛などの生活用具、祭祀用具、装身具と多くの種類があり、高度な漆工芸技術があったことを物語っています。

これら荒屋敷遺跡の出土品は、様々な生活用具の製作を含む縄文時代の技術水準の高さを示す貴重な資料です。



出土した縄文・弥生土器



出土した様々な木製品



漆塗の土偶